新 今昔物語 第19話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑧

「夕立に　虹がかかる　飯盛山」

大東市の東部は山間部で、その北側には標高314メートルの飯盛山があります。生駒山地の北西部分の支脈で、東は谷によって完全に生駒山地と分離されている状況で、生駒山地の中では半島のような地形をしています。

江戸時代に刊行された名所ガイドブックである「河内名所図会」には、形が飯を盛った形をしているので飯盛山と呼んだ名前の由来や、正平3（1348）年に楠木正行と高師直が戦った四條縄手合戦のことが記されています。

この飯盛山の西麓には、京から河内を抜け高野山に向かう東高野街道や、北側には大坂から奈良へ向かう清滝街道などがあり、要衝の地であったことから、戦国時代には南北約1200メートル、東西約500メートルの範囲で、大小約70に近い郭を有する飯盛城がありました。

飯盛城が、本格的に整備されたのは、享禄4（1531）年ごろ、河内守護畠山氏の家臣であった木沢長政が、細川晴元に味方し、飯盛城に立て籠もって戦っていたころと言われ、その後、三好長慶と晴元が長政を滅ぼした後には、交野の土豪、安見直正が入城した時期もありましたが、永禄3（1560）年には畿内を支配し三好政権を樹立した三好長慶が入城し、この地が政治・経済・文化の中心となりました。

永禄7（1564）年に長慶が亡くなり、織田信長の入洛後は衰退し、天正4（1576）年ごろ、信長によってついに廃城となりました。

（生涯学習課）

山頂に設置された飯盛城の石柱標識と説明板

飯盛山遠景